



[令和 2 年 10 月 14 日 定例会発表要旨]

シベリア抑留 – 体験者・西野忠士翁に聴く –

シベリア抑留体験を語る会 札幌 会長 建部 奈津子 氏

〈当日の語り部〉 西野 忠士 氏



建部氏

西野氏

このたびは、「シベリア抑留体験」について講演の機会をいただき、たいへんありがとうございます。西野忠士さん（95 歳）のお話を聴いて、皆様はどのように感じられたでしょうか。

私たち ボランティア団体『シベリア抑留体験を語る会 札幌』は、戦後 70 年の節目である 2015 年 2 月に発足しました。同年 10 月には「舞鶴への生還 1945—1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」（京都府舞鶴市：舞鶴引揚記念館所蔵）が『ユネスコ世界記憶遺産』に登録され、話題になりました。現在、日本全国にご存命のシベリア抑留体験者は、推定 7,000 人といわれており、平均年齢は 97 歳です。今回 講師をお願いした西野忠士さんは昨年、これまでのシベリア抑留の語り部活動を評価されて 内閣府から『エイジレス・ライフ実践章』を贈られました。西野さんは札幌市内や近郊の高校から 抑留体験の取材を受けることも多く、なかには 制作した番組が放送コンテストの全国大会へ進出したところもあります。

私が初めて“シベリア抑留”という言葉聞いたのは、今から 10 年前、知人が主宰する 戦争体験を聞く集いを手伝ったことがきっかけでした。そのとき受けた衝撃があまりに大きく、また抑留体験を持つ方は「一人でも多く この史実を知ってもらいたい、語り継ぎたい」という強い希望があることも知りました。そこで 最初に私が小さな講演会を企画したことから 活動が始まったのです。

『シベリア抑留体験を語る会 札幌』では、市内を中心に これまで 53 回の講演会を開催してきたほか、ラジオ番組「シベリア物語」の放送や出張講座など、さまざまな取り組みを行っております。

1945 年 8 月 9 日未明、「日ソ中立条約」を一方向的に破棄したソ連軍は、ソ満国境のモンゴル、ウラジオストク、ハバロフスクの 3 方面から突如、総攻撃を開始しました。8 月 15 日の終戦を過ぎてからも 侵攻は続きました。そして 8 月 23 日、60 万とも 80 万ともいわれる 日本軍人と民間人たちの筆舌に尽くし難いシベリア抑留が、ソ連のスターリンの極秘指令により始まりました。その中には、女性も 1,000 人近く含まれていたといえます。抑留者の 1 割にあたる 6 万人以上が無念にも若くして異国の地で亡くなりました。いずれも戦死ではなく、平時に 飢えと病気で亡くなったのでした。抑留は最長で 11 年間にもおよび、最終引揚船は 1956 年 12 月 26 日、舞鶴に入港しました。



(作図：シベリア抑留体験を語る会)

西野忠士さんは1945年4月、千歳で郵便局に勤務していたときに応召、三重県から戦地・満州に送られ、そこで終戦を迎えました。武装解除されたとき、満州敦化^{とんか}の陸軍病院の看護婦の幾人かは髪を刈り上げて軍服を着、西野さんたちと行動を共にしたといひます。同地では、ソ連兵による凌辱から自決した日本人女性が相次いでいたからです。そして、3年間のシベリアでの収容所生活が始まりました。



舞鶴に入港する引揚船
(舞鶴引揚記念館 提供写真)

西野さんは、想像を絶する過酷な体験を誇張することなくありのままに語られています。マイナス40℃下での天幕舎による越冬、鉄道施設建設の重労働、収容所から収容所への貨物車移動、乏しい水、南京虫の攻撃、凍土の墓穴掘りと粗末な墓標、垣間見た美しいオーロラ…。写真は、帰国するときに唯一持ち帰ったという手作りのスプーンで、戦友がアルミの導線を溶かして作ってくれたものです。



シベリアから持ち帰ったスプーンと袋

食事は、10粒ほどの豆が浮いている塩味だけのスープやコーリャン・

エン麦などの粥が飯盒の蓋に半分くらいで、200gほどの黒パンが出ることもあり。最後の一滴まで、大事にスプーンですくって食べました。栄養失調で亡くなった仲間になけなしのパンを小さくちぎって供えておくと、翌朝には何も残っていない。飢えに耐えられず、誰かが食べてしまうのです。遺体からは、シラミもゾロゾロと抜け出していきました。栄養失調で亡くなる人は、苦しむこともなく、やっと楽になれるという状態だったそうです。遺体の衣服は全て剥ぎ取り、自分で着たり物々交換をしたりと、生き延びるために皆、必死でした。

1948年6月、西野さんは作業優秀者（ハラショーラポータ）として、早めの帰還を許されます。移送途中にお腹を壊して医務室に1週間入った西野さんは、そのおりに抑留者名簿を閲覧し、100名以上の仲間の住所などを書き出しました。そして帰国後、その安否を親族に知らせました。中には遠方から、自宅までお礼にみえた方もいました。西野さんの温かいお人柄が伝わります。

戦争とそれに続く苦難の時代を生き抜いた人々にとって、いまわしい過去はいつまでも消えることはありません。二度と深い悲しみの歴史を繰り返さないために、シベリア抑留体験者の声を通して、命の大切さと平和の尊さを次の世代へ伝えていきたいと思ひます。

※編集注：『シベリア抑留体験を語る会 札幌』の詳細は 同会ホームページ <http://siveriasapporo.blog.fc2.com/> および建部奈津子氏のブログ <https://ameblo.jp/siveriasapporo/> をご覧ください。

遺構・遺物は語る

鉾山王 廣瀬省三郎ゆかりの「亭」^{ちん}

昭和初期に『手稻鉾山』の鉾業権を得て財を成した 廣瀬省三郎 有縁の建物が、中央区に遺されています。廣瀬が茶席の待合所として1933（昭和8）年に自邸の庭へ建てたもので、月を



S家「亭」（中央区南19西7）

連想させる丸窓や星型の窓が設えられ、時が満ちるのを静かに待つ客人の想いを重ねているかのような佇まいです。野趣に富む庭の樹木や石の多くは、当時、手稻から運ばれたと伝わります。

手稻郷土史研究会の本年9月の研究発表で、廣瀬が「奇壁^{きへき}」という俳号を持っていたことが示されました。のちに邸宅を譲り受けたS氏は、「交魚子^{こうぎょし}」の俳号で北海道俳句協会の初代会長を務めました。風流を愉しむ“鉾山王”の意外な側面が窺えます。[J]

— S家ご当主（2016年当時）のお話のほか、北海道近代建築研究会『札幌の建築探訪』、札幌建築鑑賞会「山鼻…田園郊外の面影を訪ねて」、北海道立文学館所蔵資料を参照しました。

【つれづれ随想】

山は友だち

小学校に勤務していたため、秋には登山遠足と称して「手稲山」に児童を引率して登ることが多かった。そのころは取り立てて山に興味も関心もなかった。ある小学校に校長として赴任したとき、教頭さんの開口一番が「校長先生、足腰は大丈夫ですか。うちの修学旅行は旭岳登山がメインです。今年は校長が引率する順番になっています」。

さあ、たいへん。登山は全くの未経験、慌てて用具を購入し、トレーニング開始。先生方のアドバイスで初挑戦は「樽前山」とした。シシャモナイコースを「苔の洞門」から登ってみた。それ一発で登山の魅力に取り憑かれ、病みつきになった。石狩・空知・後志など近郊の山々を片っ端から登り始めた。ルールは簡単、日帰り、車で往復できること。途中で温泉があるとなお嬉しい。

お気に入りの山は、二度三度と登っている。一番のお気に入りは「手稲山」である。30回以上登っている。登山ルートが「滝の沢コース」・「北尾根コース」・「平和の滝コース」といろいろあり、選べるのも楽しい。私は利用したことはないが「西野コース」というのもあった（今はないようだ）。

滝あり、清流あり、ガレ場あり、絶景ポイントありで、登山の醍醐味を味わえる「平和の滝コース」は人気が高い。ガイドブックでは初級と紹介されているが、ガレ場などはかなりきついし危険を伴うコースである。平和の滝駐車場に車を置いて滝を見てから、大平和寺横の登山口より歩き始める。最初は平坦で歩きやすい林道、しばらく進むと砂防ダムが現れる。垂直の壁面にカーテン状に水が流れ落ちている。見てるだけで涼しい。中間地点の「布敷の滝」（滑滝）辺りから道は急になり、本格的な登山道らしくなってくる。大きな石や太い木の根などが歩行のリズムを崩す。右に左にと流れていた清流（琴似発寒川）が姿を消し、伏流水となって地下を流れている音が聞こえる。



手稲山のガレ場

登山道の石がだんだん大きくなってきて、最大の難所ガレ場にさしかかる。1m前後の大きな岩が累々と急斜面に積み重ねられている。登山道はなく、岩に赤いペイントで矢印が描かれているので、それを頼りに登っていく。足を乗せた岩がぐらりと動くこともあり、肝を冷やす。若者たちのようにすいすいと歩を運ぶという状況ではなく、場所によっては四つん這いで登ることもある。およそ30分で岩との闘いは終わる。ガレ場は、登りより下りの方が技術と慎重さが求められる。

岩場が終わったところに石を積み上げた大きなケルンが現れて、980mの表示板が見える。この辺りからは眺望が開けてくる。石狩湾から手稲、札幌中心部の景観は絶景そのものである。間もなく頂上、おびただしい数の電波塔は興を削ぐと嘆く人もいるが、何本のアンテナが立っているのであろうか 壮観でもある。今の私たちの便利な生活を維持するためには必要な施設群なのであろう。

山頂には手稲神社の奥宮・一等三角点・柵に囲まれた展望コーナーなどがある。以前はロープウェイの駅があり、トイレを利用させてもらったが今はない。登山者が増えている今、札幌市も頑張ってトイレの設置を考えてほしい。山頂からの展望が山登りの大きな魅力の一つである。しかし、晴れていることは僥倖で、よほどの幸運なのである。近くの山々だけでなく、遠く羊蹄山・恵庭岳までも見えたときは疲れが一瞬にして消えていくから不思議である。

私の日帰り登山なんてものは登山とは言えず、ハイキングの延長のようなものである。登山の魅力は人それぞれ、奥深いものがある。このコースは4回登ったが、平和の滝から登り手稲側に下りて（体調が悪く）、タクシーで平和の滝まで車を取りに行くというバカなことも体験した。

永井道允（手稲郷土史研究会 会長）

◆ なつかし写真帖

「彌彦神社」があった丘



昭和 27(1952)年 5 月撮影

家族の古いアルバムに「彌彦山にて」と書かれた一葉を見つけました。現在、幾棟もの高層住宅が建つ手稲本町 2 条 5 丁目のこの辺りはかつて「日本石油北海道製油所」の社宅が並び、小高い丘の上には「彌彦神社」がありました。写真の奥に、鳥居や社祠などが幽かに見えます。

「日本石油」(現 ENEOS) の発祥は新潟県の出雲崎周辺で、彌彦信仰が盛んな地域とも重なります。石油を採掘する際は「彌彦神社」に詣でて安全を祈願したという歴史があり、手稲の地でも“石油の守護神”として大切に祀られていたのでしょう。

「子どもの頃、彌彦山は格好の遊び場で、冬はスキーも楽しんだ。林の中は冒険三昧、カシワの葉で“柏餅”を作ってもらったこともある」という夫の思い出を辿るべく、今秋、高層住宅のあいだを抜けて、わずかに遺されたこの丘へ登ってみました。足元はササに覆われて踏み入ることは難しいのですが、“鎮守の森”の名残であろうカシワやミズナラが少ないながら聳え、団栗がなっていました。

「彌彦神社」の祭神はその後、「手稲神社」の奥宮(手稲山頂)に合祀されたと聞いています。写真に小さく写る石燈籠は「手稲神社」の裏参道に移設され、いまでも健在です。

菅原 純子 (手稲郷土史研究会 会員)



★野村武雄氏が「北海道文化財保護功労者」表彰 手稲郷土史研究会の設立発起人のお一人で、昨年度まで 理事・相談役等として会の発展に寄与された野村武雄氏(92 歳)が、一般社団法人 北海道文化財保護協会(角幸博 理事長)より「第 56 回 北海道文化財保護功労者」表彰を受けられました。おめでとうございます。



表彰式(11/6 富丘西宮の沢会館)

野村氏は、美瑛町郷土史研究会の起ち上げを契機に、同町史の編纂や遺跡の発掘・保存、郷土資料館の設置等に尽力され、その後も道内各地の歴史・文化に関する研究を重ねてこられました。また、北海道大学総合博物館や北海道開拓記念館(現 北海道博物館)の文化財の研究調査や資料の整備にも貢献されました。当研究会においても、郷土の歴史や文化を次代へ伝えていくことの重要性を常に語られ、これは会員の大切な指針となっています。ますますお元気にご活躍されますよう お祈りいたします。



畝状の「バッタ塚」と記念碑(手稲山口)

★北海道新聞の取材に協力 バッタの大発生による食害が世界各地で報じられていることを受け、『北海道新聞』から手稲郷土史研究会へ、札幌近郊における明治期の「蝗害」について取材の申し入れがありました。史跡「バッタ塚」を研究テーマの一つとしている杉浦正人会員が対応し、9月29日の朝刊記事で、開拓民の暮らしを直撃した当時の様子を文献に照らして紹介するとともに、「バッタ塚は地域の歴史を伝える貴重なもの。苦労を重ねた先人の足跡に注目してほしい」と述べました。

次回定例会 ⇒ 発表内容 ①「ウシの話」石原重隆(手稲郷土史研究会 会員) ②「手稲の政治経済界を動かした『みどり亭』」一ノ宮博昭(手稲郷土史研究会 会員) / 12月9日(水) 13:30~ / 手稲区民センター 2階 第一会議室